



㈱オービック東京本社にて

独自性を発揮し、満足度を高める時代

企業も大学も、持続的にイノベーションを！

- 野田 順弘 ◆株式会社オービック 代表取締役会長兼社長
- 森本 靖一郎 ◆理事長
- 河田 悌一 ◆学長



立大学として学生とご父母にいかにか満足してもらおうかという努力が必要です。実は関西大学も今、「ワンストップサービス」を提唱しています。

◆夢を持って、がむしゃらに学べた天六学舎

森本 一介のサラリーマンだった野田会長が志を立て、東証一部上場企業を築かれた。並々ならぬご苦労があったかと思います。そもそも、学生時代からどのようなプロセスを経て、この業界に進出されたのですか。

野田 私は1957(昭和32)年、18歳で関西大学第2部経済学部に入學し、61年に卒業しました。天六学舎の一番の思い出は食堂です。授業の前に学生たちが集まってくる。当時、私も百貨店に勤務しながら通学していましたが、役所の人間もいれば、郵便局の人間、営業マンもいる。皆、働きながら大学に来ているので、何のために働くのかとか、社会の矛盾や学問と社会のつながりについて自然に議論をしていました。みんな夢を持って、がむしゃらに学んでいましたね。そういう機会を与えられたことに、たいへん感謝しています。世間では今の若者は離職率が高いといわれていますが、学校と社会との距離が広がっていることが一因だと思います。

河田 現在入社3年までにおよそ3割が辞めるといいます。関西大学は1886(明治19)年、関西法律学校として創設されました。働いている人たちも夜間に学ぶことのできる環境をつくることによって、仲間と価値観を共有し、誇りを持ち、アイデンティティーを持つ。学んだことを実際に社会で活かし、逆に社会の経験を学校で語り合うことによって、現在の野田会長のベースが作られたのではないのでしょうか。

野田 しかし、悔しいこともありました。卒業したときに、勤務先の人事部に卒業証書を持っていきましたが、付帯事項という軽い扱い。4年間黙々と働き学び、売り上げはトップクラスだったのに、大学を卒業したての後輩が私の上司としてやって来た。学歴社会を痛切に感じましたね。また、こんなこともありました。まだ会計機の時代で、会計機の販売を百貨店でやろうと業者と交渉しました。すると業者から「間接販売はやらない。技術が必要なので直接販売をする」と言われました。ショックでした。それまで百貨店はあらゆる製品を販売していました。問屋がこぞって百貨店で販売したがるのに、いったいどういうことかと…。

森本 そういう経験が、創業につながったのですか。

野田 そうです。その業者は当時アメリカ第2位の会計機メーカーでした。給料もべらぼうに高い。われわれは百貨店を看板に働いていますが、彼らは自分を看板に働いている。それに魅力を感じました。転職を思い立ち、ドイツ製会計機メーカーの大阪営業部に入社。大阪の本町の端からずっと歩いて、1日30件くらいの飛び込み営業をしました。苦しかったですが、自分を看板に働くのは、やりがいがありました。当会計機は1台250万円。社員は東京本社が80名以上で、大阪支社は4~5名。私の売り上げは、東京の営業マン全員合わせたものと同じくらいになりました。

創業来、中小企業から大企業まで数多くの情報システム構築を手がけている株式会社オービック。さまざまな業種・業界で積み重ねた経験と技術をもとに、経営管理の根幹となる会計を中心とした基幹システムの構築には定評があり、2000年には東証一部上場を達成しました。

創業者で会長兼社長の野田順弘氏は、関西大学OB。全社員を新卒から自前で育てる着実な経営とともに、メセナ活動でも注目を集めています。森本理事長、河田学長と一緒に語り合ってもらいました。

◆問題のたらい回しをしない 「ワンストップソリューションサービス」

森本 本日はオービックの野田順弘会長兼社長をお訪ねし、母校・関西大学への思いや、企業成長の秘訣などを伺います。野田会長は1968(昭和43)年に創業され、一貫して「ワンストップソリューションサービス」を掲げ、事業を大成功に導かれました。

野田 日本の産業構造は、メーカーがあり、商社や卸があり、メーカーの下には多数の下請けがあるわけですが、仮に製品に何か問題が起こったとき、消費者はどこへ問い合わせたらいいのかわからないことが多い。企業は規格品量産型で生産性を上げるのに必死で、顧客満足度を追求する体制がなかったんですね。企業の情報システムを構築するオービックは、コンサルティングから情報システム設計、サポートサービス、教育まで、全部含めてやっています。日本の産業の80%は中小企業ですが、中小企業に足りないのは人、モノ、金。それを情報力により補う。つまり情報システムを共有化し、生産性を上げ、企業の競争力をつけていく。そして何か問題が起きたとき、一括して解決し、お客様にサービスする。この考え方が「ワンストップソリューションサービス」。つまり問題点のたらい回しをしないということです。

森本 そういうお考えに至った背景をお聞かせください。

野田 かつて、コンピュータにはハードウェアの時代がありました。ハードの差だけでシステムが左右された時代ですが、オープンシステムになって、どのメーカーのハードにも共通のソフトウェアが載せられるようになりました。こうなるとソフトウェアに対するユーザーのニーズが高くなります。例えば、生産性をこうやって上げたいとか、人のマネジメントはこうしたい、在庫管理はこんなふうにしたいなど、要望がどんどん出てきました。さらに今、ソフトからサービスの時代になってきています。つまり、システムをどれだけ使いこなしているかということが大事です。お客様の満足度を上げるためには企業の独自性を出し、ハード、ソフト、サービスの問題を一本化しなければならぬ。そういう時代背景も、ワンストップソリューションサービスの考え方を持つに至ったポイントです。

河田 「問題点をたらい回しにしない」ということは、今の私学運営にも通じます。第一にわれわれは国立大学と違って、学生の授業料で経営しています。ですから、顧客として学生を非常に大事にしています。二つ目に、ハードウェアの時代からソフトウェアの時代というお話。まさに大学もそうで、私立大学は建学の理念に基づき、その大学の校風に合わせた人材を育てることができます。三つ目に独自性を出すということですが、これも大学に当てはまりますね。国立大学との競争ではなく、私



森本靖一郎 (もりもと せいいちろう)
1932年奈良県生まれ。関西大学文学部、法学部卒業。母校に奉職し、67年に関西大学教育後援会幹事長に就任。「大学と家庭のかけ橋」をモットーに、大学と父母間に信頼の絆を作り上げた。飛鳥文化研究所の開設にも尽力。事業局長、常務理事を経て、2000年専務理事、04年10月理事長に就任。「強い関西大学」を提唱している。

大学の持つ教育力は、きちんと評価されるべき。学生の将来につながる、どこよりもしっかりした教育力を備えた大学に。

◆教育にも研究にも「強い関西大学」

森本 手前味噌ですが、私が理事長になり「強い関西大学」を提唱し、河田学長が強い関西大学の教育・研究を推進し、両輪となってやってきました。すると本当に、教育も、研究も、スポーツも、就職も、財政も強くなってきました。今回、文部科学省のグローバルCOEに「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」というプログラムが採択されました。私学では本学を含む4校のみで、願ってもない快挙に喜んでます。

野田 それは素晴らしいことですね。関西大学は、骨太な、あまり細かいことは気にしない、質実剛健な校風ですね。私が卒業するころは、そういう学生気質を強く感じました。今は時代の流れもあり、個性派が減って、他大学の学生と区別がつきにくいように感じます。

河田 確かに、今はどの大学の学生も似通ってきています。が、細かく観察すると、それぞれの大学の特色は受け継いでいると思います。司馬遼太郎さんが、「大阪は悲しみが似合わない町で、いつも生き生きしている」と言っていますが、関西大学の学生には、大阪らしい、明るく、たくましく、そして生き生きとした個性があると思います。

野田 教育で大切なのは、学生さんが社会にチャレンジする可能性を育むことだと思います。社会は自己意欲達成の場であって、関大生も多少、個性派が減った気はしますが、泥臭い人間力と仕事力があり、現場で力を発揮できる感性がある。それが他の社員の気力をも高めてくれています。採用の面接をしていても、将来的に社会で活躍できる素材を育ててもらっているなと感じます。

森本 大学の持つ教育力は、きちんと評価されてしかるべきものです。競争的研究資金の獲得実績等で評価されることは、もちろんありがたいのですが、マスコミなども教育価値を軽視しがちです。ご父母は、自分の子どもを教育してもらうために入学させ、授業料を出しているのであって、先生に研究してもらうためではないのです。そこに矛盾があります。私は父母の組織である「教育後援会」を育て、卒業生・ご父母の同窓会である「千寿会」を作りましたが、皆さんの思いに応えるために、学生の将来につながる、どこよりもしっかりした教育力を備えた大学にしていかなければなりません。

◆ふるさと・奈良と母校・関西大学へ、そして社会へ還元したい

森本 ここで、夢のあるお話をいたします。名誉教授の網干善教先生が亡くなられて、実は私の夢枕に2度お立ちになりました。カビだらけになった高松塚古墳の壁画をなんとか復元したいと。それで、野田会長にご相談したら、すぐに協力しようと。高松塚古墳の壁画をセラミックで復元するので、永久保存が可能になります。会長が即決してくださったときには、背中に電気が走るような感動を覚えました。

野田 愛するのはふるさと・奈良であり、母校・関西大学です

◆採用は新卒のみ。「ふまじめな人間」大歓迎

森本 現在、オービックは離職する人が非常に少ないと聞きました。これには驚きました。

野田 当社の大きな特徴は、新卒しか採用していない点です。日本に企業はたくさんありますが、新卒だけでやっている会社は他にあまりないと思いますよ。会長である私と副会長である妻が、採用の最後の決定をしています。で、私はどういう人間を探りたいかという、第一に「ふまじめな学生」。ふまじめな人間は考え方に柔軟性があり、対応性がある。それで頭が良かったら最高です(笑)。2番目に「頭が少々悪くてもふまじめな学生」。このタイプは当社に多いんです。3番目は「頭が良くても真面目な学生」。

私たち夫婦には子どもがいません。会社の財産は何かといえば、人材がどれだけ成長するかに尽きる。数字には表れない無形財産ですね。これを伸ばしていったら、会社は勝手に結果として伸びていく。当社では1年間に約1カ月間の教育期間を設けて育てています。そして育てるには、全社員が持てる力をフルに発揮できるフラットな環境にしなければならない。

河田 その頭の良し悪しというのは、知識の集積としての頭脳ではなく、工夫する力、いわゆる知恵、頭脳を上手に使う知力ということでしょう。関大生の知力は高いです。さまざまな企業から、体力があり、時間をうまく使うという評価も得ています。しかし、これだけ会社が大きくなって、フラットにやるというのは難しいのでは？

野田 大変です。当社の専務は喫茶店で、出勤してくる社員をウォッチングしています。ちょっと肩を落としているとか、覇気がないとか、そういう社員に毎日200人ぐらい声を掛けています。企業も組織もフラットであるべきというなら、部長も専務もフラットであるべきで、机に座っていたらだめ。昼は昼で、お客様と食事をしないときは、社員と一緒にランチミーティングをする。これを課長や部長に任せるのではなく、役員にやらせています。

から当然のことです。私は情報産業に携わっていますが、情報が氾濫する社会で、その情報の裏には絶えず人がいるわけです。これがソフトウェアからヒューマンウェアへ、人間力へといわれるゆえんです。情報産業が時代の価値観をつくる、そのための人間力をつけないといけないと思っています。

河田 その思いを受け止めながら、それに報いるだけの教育・研究・社会貢献をしなければと思います。やはり会長が言われたような、チャレンジする精神力を養う大学にしたい。社会に出てからは、その精神力、チャレンジ精神で、自分の目標を達成してもらいたい。

「大和は国のまほろば」。会長は、そのふるさとにお返しをしたいとおっしゃる。利益を自分のものにするのではなく、社会的な事業、大阪総合スポーツ財団にも寄付していらっしゃいますね。

野田 大学では山岳部でしたが、働いていたのであまり活動できませんでした。学生時代に達成できなかったスポーツや部活への思いを、こうして今、社会で果たさせていただいているわけです。

森本 その意味では、社会人スポーツのアメリカンフットボールの全国制覇、オービックシーガルズが日本一を勝ち取ったことは、何よりの成果でしたね。

◆問題から逃げるのではなく、問題に向かっている

森本 おかげさまで本学は標榜する「強い関西大学」に向けて着実に前進していますが、こういう大学になってほしいというご希望やご注文をお願いします。

野田 先輩である私から見て、今の学生は結果主義で、すぐに成果を出したがる傾向にあります。私のモットーは「あわてず、あせらず、あきらめず、あかるく」、四つの「あ」です。早く成



河田悌一 (かわた ていいち)
1945年京都市生まれ。大阪外国語大学中国語学科卒業。大阪大学大学院で中国哲学を専攻。86年関西大学教授。文学部長、副学長を歴任し、2003年10月学長に就任。1991年に在外研究員としてプリンストン大学で中国思想史を研究。文部科学省大学設置・学校法人審議会委員。社団法人日本私立大学連盟常務理事。財団法人大学基準協会理事。

チャレンジする精神力を養う大学にしたい。社会に出てから、その精神力、チャレンジ精神で、自分の目標を達成してもらいたい。



野田順弘 (のだ まさひろ)
1938年奈良県生まれ。61年関西大学経済学部卒業。近畿日本鉄道百貨店部、会計機輸入販売の東京オフィスマン勤務を経て、68年に独立し株式会社を設立。74年に社名を株式会社オービックに変更。2000年には東京証券取引所の市場第一部に上場。現在、同社代表取締役会長兼社長。07年関西大学客員教授に就任。

イノベーションを持続することが大切。問題から逃げるのではなく、問題に向かっている企業でありたい。

果を出す時代に、じっくりと関西大学ならではの精神力を身につけてもらいたいですね。

この数年間で、たくさんのベンチャーが出てきましたが、社会の倫理観から外れた残念な事件もありました。倫理教育、コンプライアンスの教育が非常に大切です。私の好きな言葉に「信汗不亂」があります。オリックス監督だった故伊木彬さんの言葉で、一生懸命流した汗を信じれば道は開けるという意味です。若者には、自分で流した汗を信じて頑張ってもらいたい。

理事長、学長が両輪となって、学校のイノベーションに挑戦されることは、素晴らしいことです。母校の卒業生の皆さん方にも人生の可能性に挑戦していただける企業として、責任と環境づくりが必要だということを改めて思いました。

河田 少子化が進む21世紀の日本で、存在感のある大学として、バイタリティーあふれる学生を育てなくてはと思っています。今年は社会学部ができて40周年にあたり、先日の記念のシンポジウムでは、映画監督の山田洋次さんと女優の水野真紀さんをお招きし、在学生、先輩たちも参加して盛会でした。

オービックも来年40周年ですね。論語に「十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず」とあります。会長はこの40年で、惑わず自分の思いを形にされ、成功されたことを社会に還元し、企業の社会的責任を果たしておられます。満腔の敬意を表するとともに、会長のような卒業生の存在をたいへんうれしく、かつありがたく思っております。

野田 こちらこそ、母校には感謝しています。なお、オービック(OBIC)の社名は、オーガニゼーションのO、ビジネスのB、イノベーションのI、コミュニケーションのCという頭文字を取って名付けました。私は特に、I=イノベーションを持続することが大切だと考えています。つまり社会の不満足なところを満足化していくためのイノベーションで、問題から逃げるのではなく、問題に向かっている企業でありたい。そんな思いを込めています。

森本 野田会長には11月27日、商学部の客員教授としてご講演いただくことになっています。学生に対して、起業家としての精神、企業の倫理観、使命感などを伝えていただければとお願いました。今日は示唆に富むお話をありがとうございました。